論文の内容の要旨

「持続可能な発展のための内発的教育（内発的 ESD）」の構築へ向けて—社会変動・環境変動と向き合う現場における学びのダイナミクスの考察—

（An Approach to Formulating “Endogenous Education for Sustainable Development”—Deliberations on Emerging Learning Dynamics in the Context of Social & Environmental Changes—）

氏　　名　岩佐　礼子

一見様々な制度や政策と市場経済が現代社会を形作っているようだが、現場では、それらとは次元を異にする地域独自の生活世界の発展が日本各地で重層的に進行している。本研究では、事業化され政策的に普及される現行の「持続可能な発展のための教育（ESD: Education for Sustainable Development）」が前提とする、均質的な個人の集合と安定した自然・社会環境を前提とした教育アプローチの限界を示し、地域で内発してくる発展の内実と、そこに埋め込まれた学びを探求する事例研究によって、その学びと現行の ESD との相違を明らかにし、本研究が提起する内発的 ESD という教育のあり方を提起することがこの研究の目的である。研究の理論的枠組みは鶴見和子の「内発的発展論」を中心に、「共同性」の分析視角をアマルティア・セン（1993）や佐藤仁（1997）の「潜在能力」の理論で、「学びの質」の分析視角をマイケル・ポランニー（1966＝2003）の「暗黙知」や「創発」といった理論で考察していく。

この研究の特徴は、現場における不確実な自然環境と変動する社会の現場において、不完全な人間が想像力と創造性をもって立ち上げていく地域独自の内発的発展の学びに着眼していることである。その際、自然と人とかかわりながら現場を生きていく人々が、おそらく何世代にもわたり持続してきた生活世界における発展の基本となる内発的な学びを本研究では「内発的教育」と定義し、まず、その内実を内発的発展のモデルとされている事例地において調査し、分析して導き出す。そして、「内発的教育」を土台（伝統）として、外から異なる知識（科学知など）や技術といった「非内発的教育」を取り入れつつ、地域に根ざし、かつ環境や社会の変動と折り合いながら発展を目指していく現場でのプロセスに埋め込まれた教育を「持続可能な発展のための

内発的教育（内発的 ESD）」と定義し、地域にねざし、また変動に応答しながら発展を希求する実際の事例を通して、「内発的 ESD」の内実を探っていく。

本研究が理論の中心に位置づけるのは、鶴見和子（1989）の内発的発展論である。通常の発展概念が主に国単位で捉えられ、その発展に寄与する個人は国民という顔のない抽象的な人間を前提としていることを鶴見は問い直し、こうした国単位で発展の程度を数値で測り、より良い数値の発展をめざしていくといった近代化思想に基づく直線的で一元的な発展観を批判した。そして地域の自然生態系に基づき、伝統や文化を軸に、多様な個性を持つ住民の創造性による内発的発展を提唱した。内発的発展は地域単位で起こり、地域の風土や文化伝統に根ざした発展であるゆえに、多様性に基づく発展形態となり、ロストウの唱えた経済発展段階説（Rostow 1960）をモデルとする一元的発展と区別され、多元的発展と捉えられている。

研究背景として、特に第二次世界大戦以降、経済重視の発展を先進国が中心となって牽引してきた結果、世界中で公害や地球温暖化といったさまざまな環境問題が浮上し、1992 年のリオ地球サミットを機に、国連主導で「持続可能な発展」を政策的に達成する取り組みがある。これによって、主に CO2 削減策やエネルギー政策などで物質循環を正常化し、エコな社会を実現するための効率的で合理的な発展が目標になりつつある。この「持続可能な発展」を教育によって普及しようとする国連主導の動きも生まれ、1992 年の地球サミットを転機にし、環境問題解決のための環境教育から、環境問題を生み出す人間社会のあり方を変革するような価値観を教えるための ESD へと教育内容が移行していく。そして 2005 年には国連主導の「ESD の十年」というグローバルな ESD の普及プログラムが開始された。

一方、持続可能な発展の障壁として、ベック（1986=1998）やイリイチ（1980=1989）は、人間の「都合のよさ」を追求するための道具として発展した産業主義によって、消費と労働の閉鎖路に閉じ込められている不安や、科学技術に付随するリスクといった、現代文明の表層にある問題を提起する。小原秀雄（1984）や森岡正博（2003）は、さらにその基層にある人間性に視座を置き、問題提起する。小原は、安全かつ便利で豊かな社会を支える人工的環境への人間の依存度が増し、馴化していく様を自己家畜化として指摘しているが、森岡（2003）はこれを人間自身の主体的創造性の喪失の問題として捉え、管理によって、不確実性を排除する「身体の欲望」が支配する「無痛文明」の呪縛を打開するために「自分の内部から湧き出る力」を持つ人間の内発性に根ざした「生命のよろこび」を再生する必要を説く。この人間の内発的で自律的な力を持って、管理よりは共生によって自然とかかわっていく方法として、市場経済と主体的創造性のバランスを取る感覚を身に着ける「自在に生きる技」や、それを支える共同性を指し示したのが内山節（1999）である。これは、国家ではなく、現場で人々が主体となって持続可能な発展を追求していく道筋であり、本研究はここに鶴見和子の提唱する内発的発展論の正当性があり、また、その発展の道筋を支える学びこそが本来の ESD であると捉える。

こうした背景を踏まえ、まず、第一章では、内発的 ESD の核となる「内発的教育」という伝統を、綾町上畑地区と西川町大井沢地区の生活世界に根ざした学びの事例から抽出した。この学びは分析によって、知識や技能、価値観や精神性を軸とした「人と自然とのかかわり」と「人と

人とのかかわり」という二重の関係性を内包する明確な構造を持つことが分かった。前者の関係性からは、大井沢の生業の学びから見えてきた、自然物に対する深く親密な学びの暗黙的構造が、後者の関係性からは、伝統や文化の継承と共同性の構造が判明した。さらに、この構造には鶴見（1989）が提示した伝統の四つの型も合致している。内発的 ESD は主に口頭で身体を使う手法で学び、学ぶものも教えるものも固定されない自在な共育であり、生涯持続する。

第二章では、個人は不完全ゆえに共同するという視点で、共同体としての機能を達成する潜在能力を千葉県市原市の二つの出羽三山講の講集団の事例で考察した。三世紀もの講活動の持続性を支えてきたものは、まず出羽三山という自然の教育力と、講の儀礼や活動に埋め込まれた共同性という、内発的 ESD で育まれた能力が集合された集団としての潜在能力である。加えて、自在な信仰が許容されることで、メンバーが複数の講や地域組織を掛け持つ多重層共同体が形成され、それらをつなげる人と人との信頼に根ざしたネットワークの潜在能力も見逃せない。地域にはこうした暗黙的な潜在能力を秘めている人々や集団が存在するのである。一方で、綾町内の伝統的な講の調査からこの講が形成する自治的な共同性の内実を詳しく調べ、現代的な自治公民館制度の運営の共同性と比較したところ、非常に強い類似性が見て取れた。すなわち、伝統的な講を土台とした共同性が、現代的な自治公民館制度の導入の契機に、その運営に統合され、「伝統の再創造」が起きたと考えられ、それが自治公民館制度の評価と持続性を支えているといえる。

第三章では社会変動と折り合う能力を探った。大井沢小中学校の自然学習の 56 年間の歴史から、開発で変わっていく大井沢の地域社会や、持続的にローカルな知識を提供し続ける住民達と、次々に入れ替わる教員達との関係性から紐解いていった。僻地教育としての創意工夫で始まった自然学習は、子ども達が内発的教育で身に着けた力に科学知を統合した、動的な内発的 ESD であり、教員や住民、子ども達の主体性による柔軟で変化に富む地域の社会と自然に根ざした教育であった。それは自然学習を通した学校と地域の共同によって、過疎化という変動に向き合いつつ、創り上げてきた内発的発展の歴史でもあった。次に社会変動と寄り添う人々の営みから生まれる発展のもう一つの事例を綾町の現代型頼母子講で考察した。そこでは、契機縁による救済目的の講が、有志縁による精神的紐帯形成の講へと次元を移行しており、いわば社会のニーズの変化と伝統の要素が成熟した結果、回転信用組合の機能の次元を超えて、現代型頼母子講が創発したと考えられる。本研究においては、伝統の再創造と共に創発は内発的発展においても重要な展開であると位置づけた。

第四章では、環境変動と折り合う人々の能力を、東日本大震災で被災し、復興を目指す陸前高田の八木澤商店と南三陸町伊里前地区の契約会という講集団の事例で見ていった。すると、危機という契機において、個人や集団が蓄積していた、動的情報を含む内発的 ESD が力を発揮し、外部からの異質な要素（人々や組織、価値など）との出会いによって、新たな復興の展開が起きていた。例えば八木澤商店は自社再生とともに地域の経営者仲間と共に共同体としての復興をめざし、外部の支援を受け「懐かしい未来」という事業を立ち上げた。そして、伊里前ではかつてのヤマ学校が復活し、学校の授業と協同するといった伝統の再創造が起こっていることが示された。また、震災で地元の自然との深いきずなを実感した若者たちが巨大防潮堤建設の見直しを迫

る活動を起こしている。

このように、人間が内発的教育を土台にした潜在能力を持って、社会や環境の変動の契機に、外来の知識や発想、技術などを取り入れ、伝統を再創造しながら乗り越えていくこともあれば、内発的教育が埋め込まれた日常の営みの中から、ある契機に次元の異なる展開が生まれ、創発が起こることもある。こうして、内発的 ESD が変動に伴ってダイナミックに人間の営みを支え、変動を乗り越えて持続させていく。この、人間の内なる可能性を発現しながら持続を希求するメカニズム、すなわち内なるサステナビリティの構築こそが、この持続可能な発展を人間の成長の視角で捉えることの真の意味であり、この内なる持続可能性の構築を「自在に生きる力」、すなわち内発的発展に埋め込まれた内発的 ESD が支えていると結論づけられる。内発的 ESD とは自分自身の生命に根ざした力でもあり、地球上の歴史において唯一無二の存在に潜在する能力である。このリスクと暴力と不安にまみれた現代社会で多くの人々が希望を持てない中、内なるサステナビリティには希望を持つ能力と、社会変動や環境変動の際には、それを使い賢く生きるための道筋が埋め込まれているのである。